

精神発達遅滞幼児の集団治療教育

——感覚教材について——

西山恭子

一般に世間では、ちえの遅れた子どもたちを精神薄弱児と呼んでいます。専門家の間では精神発達遅滞児と呼ぶ傾向となってきました。ちえ遅れの子どもと実際に接してみますと、やはり精神薄弱児というより精神発達遅滞児といった方がより正しいと思われる。生活年齢四才の子どもが、発達年齢は一才半ということになります。生活年齢四才の子どもが、発達年齢は一才半ということになります。精神発達が薄弱ではなく、遅滞しているのです。遅滞はしていますが、ほとんどのケースはまだ発達の途上にあるのです。

最近、どうやら方々で、この精神発達遅滞児の中でも、生活年齢の小さい幼児の指導、教育の重要性がきかれるようになってきました。前月号で、愛育研究所の家庭指導グループについて、簡単な説明をいたしました。が、今回は私たちがこのグループで行なっている、精神発達遅滞幼児の集団治療教育について申し述べたいと思います。

ここでいう「治療」は医学的治療ではなく一人ひとりの子どもが環境に適応しながら、自発的に状況を展開させていくような状態になりうるようにすることをいいます。

一概に精神発達遅滞児といっても、単純なちえ遅れだけでなく、その上にいくつかの障害——てんかんとか脳炎後遺症、あるいは固執性が強いとか粗暴とか——を持っている子どもがかなりあります。こういう子どもの指導にあたっては、その障害を取り除き、持っている能力を十分に伸ばすような治療的配慮が重要であると考えます。

そこで、病原学的にみて、てんかんや脳波に異常スバイクができる子どもは、一方では医学的治療を加えながら、グループとしては第一に内的な緊張を解消することを試みております。医学的治療に関

して申し述べる資格はありませんが、てんかんの薬を服用している子どもの中には、体質とうまく合わないらしく、○・一ミリ、○・二ミリグラムのわずかの増量で足元がふらつき、些細なことで大けがをしたり、それではと量を減らすと大発作が起こってしまうというように、薬の種類と量によって、その影響が非常に強い子どももいます。ちえ遅れの子どものお母さん方は、歩行が遅い、言葉がでないなどと気がついたとき、たいていは病院へ走ります。

グループの子どもの多くのケースは数多くの病院を歩きまわって「遅れます」と診断されて、私どもの方へまわってきますので、てんかん発作のない子どもでも、ガンマロンとか精神安定剤とか種類の服薬をしている子どもが多いのです。ある一人の子どもによって、その日のグループ活動がめっちゃめちゃになったとか、逆に攻撃性のある子どもが調子が良かったとかいう日には、お母さんにお薬を変えたのですか、量を減らしたのですか、あるいは何かお薬を飲んでみますかと尋ねてみることも大切ですよ。

こういう子どもがいました。生活年令三才五ヶ月になるのに一人で歩けないのです。保育室ではたごろりと横になっていることが多く、たまに這って歩いては手にさわるものを中指でさわってみるくらいでした。ところがある日、歩きまわっているではありませんか。ヨタヨタしながらも、とにかく一人で歩いているのです。驚いてお母さんに尋ねますと、脳波に異常はないのだけれども、病院で

何かのお薬をもらっていたのを、病院をかえ、薬もかえたとのことでした。薬の力の大きさに恐くなったわけですが、この子どもはやる意欲がないとか、攻撃的で手におえないとか一概にいつてしまう子どもの中には、それが服薬に原因している子どももいるということとを述べておきます。

本題に戻りまして、緊張が解消されてくると、外的な物事に興味をもつようになり、さらにその事物を自信をもって扱うようになり、自分の活動に喜びと満足をもち、他人にも認められるようになります。そういう活動を自己活動と名づけました。

このような自己活動をすすめるのに適当なものとして考えた教材は、主に触覚を通して素材に親しむことのできるフィンガーペインティング、フットペインティング、ドーフ粘土、泥粘土、マジック、クレヨンなどによるペインティングでした。これらの素材は、緊張解消にかなりの効果を示しましたが、子どもの興味と意欲の開発にも適しており、能力が進むにつれてさらに進んだ取り扱いが可能でもあり、程度の低い子どもから比較的高い子どもにまで活用されました。

グループに入ったばかりの頃は、お母さんの方が大変という方もいらっしゃいます。あるお母さんは観察室からのぞいていて、帰り支度の際、自分の子どもだけ素直に着がえないのを見て、思わず飛びだしてきてしまいます。そして「Kちゃん、だめでしょう。お着

替えしなさい」と叱ります。あるお母さんは水道をジャージャーだすのをみて「Mちゃん、またびしょびしょにするんでしょ」とさつと水道を止めてしまいます。机にのぼればお行儀が悪いと叱られます。やることなすこと、すべていけないと止められていたのでは、その子どものいる場所がなくなります。しかし、お母さんにとってそれは無理もないこともあります。水いらずらで家中水びたしにされれば叱りたくもありませんし、病院にいつても待合室にじっとしていることができずに、人のバッグをあげたり、他の子どもを可愛いがるつもりがいやがられたりすれば、ついつい「いけません」が口からでてきてしまうわけです。

ところがこういうお母さん方も自分と同じえ遅れの子どもの持つたお母さん方と接し、観察室から、フィンガーペインティングや粘土、箱積み木や、さては喧嘩の場面などもみているうちに、観察室から飛びだすことはなくなつてまいりますし、フィンガーペインティングでスモックをドロドロにしても「よく遊んだわね」と、にこにこするようになってまいります。そうなると、子どもも目に見えて安定してくるのです。

さて、触觉を主とした感覚教材について、材料の作り方と指導法を述べたいと思います。

(I) フィンガーペインティング(写真①)

材料、作り方

メリケン粉を粒のないようになめらかにして少し固めに煮ます。これにホスターカラー、粉絵具などで好みの色をつけます。原色より淡色が好まれ、黄色、黄緑色などが無難のようです。クリーム色をつけると「クリームみたい」とか「うんこみたい」といいながらペイントに飛びつく子どももいます。

指導法

腕まくりをしてビニールの前かけをかけてからペイントを与えます。両腕を思い切り伸ばしたり、手を机につけたままぐるぐるのまわりを歩きまわったり、中には指導者の腕や足にまでペイントをつける子どももいますが、その場合禁止せずにやらせます。指導者



写真①

も汚れてもいい服装でのぞまなければ指導はできません。

作品を残すことより欲求不満解消が大きな目的ですから、小さな画用紙ではその効果はそれほど期待できませんので、模造紙、ビニール布、プラスチック板などを机いっぱい敷きつめました。デコラの机ができてからは、もっぱらその机の上でしか行なっております。

衝立てで仕切られた二部屋のうち、北側の落ち着いた感じの部屋を使用し、指導者一人が子ども一人か二人を相手に指導します。他の子どもはその間、主に南側の活動的な雰囲気のある部屋で箱積み木やマット、木汽車などを使って遊びます。しかし時によっては、数人の子どもがワットと北側の部屋へ集まったときには、南側の指導者か記録者が、北側の指導に早がわりをします。フィンガーペインティングで充分に発散し、満足した子どもが、自然に机を離れると、交代にばやとしていた子ども、フラフラしている子どもなどをフィンガーペインティングに誘導します。

子どもによって違いはありますが、十回近くフィンガーペインティングを続けると、むやみやたらに指導者や他の子どもの服にペトペトペイントをつけて楽しんでいた子どもたちは、その行動が変ってきます。ある子どもはペイントをみてもそれに手をだそうとしなくなり、他の遊びに熱中しはじめます。その場合は、緊張解消という点では卒業していることが多く、強制せずに夢中になっている遊び

を發展させるようにしむけます。ある子どもはヒチャヒチャ、グチャグチャから指先の動きのおもしろさに興味をもちはじめます。そうなると次の造形への發展の第一歩を踏みはじめたわけですから、ドーフや泥粘土を主に、その芽を伸ばすような指導段階へ入りますが、現在この段階の子どもはやっと一人か二人という状態です、この先の發展が急カーブを描くことはまれのようです。

(II) フートペインティング

材料、作り方

フィンガーペインティングと同じ着色しない方がよいでしょう。

指導法

大きなビニール布を敷いたり、ビニールプールなども利用できます。子どもは夏ならパンツ一枚にします。暖房とお風呂があれば夏同様の姿でできます。

ペイントを足の裏につけ、すべったり、尻もちをついたり、はらばいになったり、全身を使って思う存分活動できます。泥粘土をきかないといやがっていじらなかつた子どもが、このフートペインティングをやらせてからは、それもやや強引にやらせてからは、意外にも喜んでやるようになったケースがあります。

また、フィンガーペインティングの最中、フートペインティングを思い出しか、自ら靴下を脱いで机に上がり、その上でフート

インテイングが始まるということもあります。

(III) ドーフ粘土

材料、つくり方

薄力粉を少量の水でべとつかないようによく練ります。食紅で色をつけたり、安息香酸を入れれば一週間ぐらいは発酵しません。

指導法

ドーフとドーフをくつつけることはできませんので、造形活動には適しませんが、他の粘土に比べて弾力性に優れており、泥粘土のようにべとつかず手が汚れないので、泥粘土をいやがる子どもでも、このドーフ粘土は抵抗感なく素直に受け入れられます。このドーフ粘土を数回扱ってから、泥粘土に移る方法をとっております。

三才児クラスには泥粘土よりずっと好まれております。家庭でも容易につくれますので、この粘土の好きな子どものお母さん方は、家でも作って与えていらっしやいます。

子どもの扱い方はグチャグチャいじりまわして感触を楽しむ、ちぎる、ベタベタたく、ちぎったドーフを積み重ねる、指で穴をあける、引っぱるなどが共通にみられます。比較的程度の高い子どもに見られる扱い方は、まるめる、細長くする、型をはめこむ、人形にたばさせる、トンネルの下をくぐらせるなどです。低い程度の子どもにみられる扱いは、なめる、においをかぐ、作品をこわす、

あごのところでベタベタする、他の子どものドーフをとるなどです。時にはままごと道具を持ってきて「どうぞ」というやりとりと食べる真似が精一杯のままごとに発展していくこともあります。

(IV) 泥粘土

指導法

一度に多量の粘土を与えます。家庭指導グループでは、ある会社に一袋五キロ入りの泥粘土を十袋注文したところ、その会社からあまりに注文が多すぎるからおかしいという問合せがあつて、なにご多すぎるのかと合点がいきませんでした。泥粘土でもって、充分な自己活動をしようとする子どもには一人に一袋ぐらいは与えたいものです。申しわけ程度に少量の粘土を持たせてみても、それは泥粘土の意味を持ちません。

子どもの扱いはドーフ粘土とほとんど変わりありません。ドーフより形をつくる点では優れていますから、トンネルをつくるとか、小さな塊を汽車にみたとてるといった扱い方を子どもが、ドーフ粘土よりは多くみられます。

Yちゃんは自分でつくろうとせず、指導者につくらせてはそれを「汽車ポップ？」「象さん？」などとみているだけでしたが、そういう段階の子どもには「こんどはYちゃんつくってごらんさい」という指示は慎しまねばならないことが分りました。何回でも次か

ら次へと作ってみせることです。そうしながらフィンガーペインティング・ドーフ粘土において、思いきり活動させます。このYちゃんはまだベトベトドロドロの段階なのです。しかし言語面が著しく遅れている他の子どもの中で、急激に言葉数が増え、その進歩に目をみはるばかりなので、まだまだ創造以前であることを忘れて、つい「つくってごらんさい」といってしまうのです。こういう場面、能力以上の要求をしてしまう場面というのはYちゃんに限らず、また逆に子どもの要求を理解できずに応じてやらなかったり、無理に指導者側の要求に合わせってしまったりということもやってしまっていることに気づきます。指導という立場にたつと、どうしても「させる」という気構えをもってしまいがちですが、治療という点では、これは最も戒めねばならないことなのです。

(V) ペインティング(写真②)

これは「お絵かき」のことです。材料はポスターカラー、マジックインキ、クレヨン、白墨、鉛筆などです。これも大きな紙や、一間×二間の黒板、大きなガラス戸などを使用し、全身的表現とします。

指導法としての強制は、セラビーとしてはマイナスとされていますが、刺激に対する反応が極力弱い、限られた個人には、感覚教材を扱う場面においてもかなり強く誘うことを必要とする場合もあり

写真②



ます。

一年間、感覚教材を充分に取り入れた結果、自己活動の発展に関しては、かなりの効果がみられました。

自己活動ができるようになると、次第に他人に対する関心が生じてきます。(对人的能力の指導については「教育と医学」十三卷十一号を参照していただければ詳しく述べられております)

(愛育研究所)